

## 論文

# 災害時の個人情報提供への同意・不同意を 予測する要因

——京都府精華町での質的・量的調査を通じて——

松川杏寧<sup>1)</sup>・立木茂雄<sup>2)</sup>

**要約：**本研究は、災害時要援護者を対象とした個別避難支援プログラムの策定のために、災害時の個人情報提供への同意・不同意の意思決定に影響を与える要因を探索することである。民生委員を対象としたワークショップから得られたキーワードをもとに質問紙を作成し、精華町の災害時要援護者情報システムに登録されている対象者を母集団とする計量調査を行った。結果、民生委員に対する信頼が非常に重要な要因であることが明らかになった。東日本大震災の経験を活かし、民生委員を中心に多機関で連携しつつ情報の収集と共有にあたることができるよう、各自治体がバランスを取りつつ条例や要綱を用いて対策を進めていくことが求められる。

**キーワード：**東日本大震災、災害時要援護者、個人情報提供、同意／不同意

## 目次

### はじめに

#### 1. 先行研究

- 1-1. 精華町の現状
- 1-2. 被援助志向性
- 1-3. 災害時要援護者のスクリーニング
- 1-4. 目的と意義

#### 2. 研究1：民生委員を対象としたワークショップ

- 2-1. 方法
- 2-2. 結果
- 2-3. 成果物：個人情報提供への同意・手あげに影響を与える要因仮説

#### 3. 研究2：要援護者を対象とした質問紙調査

- 3-1. 方法
- 3-2. 結果
- 3-3. 考察
- 3-4. 今後の課題

1) 同志社大学特定任用助教，研究開発推進機構

2) 同志社大学社会学部教授

\*2015年10月19日受付，2015年10月20日掲載決定

## はじめに

2011年に発生した東日本大震災について研究が進められている中、災害時要援護者の被害の規模や課題が明らかになってきている。立木（2013）および Tatsuki（2013）は、東日本大震災では、発災前から「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」（内閣府 2006）が策定されていたにもかかわらず、在宅介護の多いノーマライゼーションの進んだ地域で高齢者や障害者に被害が集中していたことから、地域での災害時要援護者に対する対策が不十分であった可能性を示唆している。災害時要援護者対策の課題として、Tatsuki（2012）は、1）想定ハザードは最大確率事態（maximum probable event）ではなく、最悪事態（maximum possible event）を想定すべきであること、2）現行の要援護者対策は発災時の避難支援が中心で、避難後のアフターケアに関する具体的なガイドラインが必要であること、3）個人情報保護を気にするあまり、行政と民間団体との間での要援護者の個人情報提供が進まず、避難所や被災後のコミュニティで要援護者が不便な生活を強いられること等の3点を指摘している。

現在の要援護者対策の進捗について、消防庁（2012）の各市町村を対象とした「災害時要援護者の避難支援対策の調査結果」を見てみると、各市町村において基本的な要援護者に対する方針を定めた「全体計画」は83.5%が策定済み、「災害時要援護者名簿」は64.1%が整備を完了している。しかし「個別計画」は28.8%しか策定されておらず、大多数の自治体では実際の避難支援プラン実行までは至っていない。このことから、災害時要援護者対策の課題の一つは、個人単位の具体的な個別計画の策定が進んでいないことであり、その要因の一つとして要援護者の個人情報収集がうまく進んでいないことが考えられる。

災害時要援護者の個別避難支援プログラムを策定するにあたり、なぜこのような困難が生じるのであろうか。大きな要因として考えられるのは、個人情報保護に関する法律による問題である。山崎ほか（2006;2007）によって詳しく議論されているが、大きく分けると問題点は2点に分けられる。1点目は、個人情報保護法の制定により、国民全体で自身の個人情報の管理についての興味関心が高まった反面、個人情報保護法に関する正確な知識が行き渡っておらず、個別避難支援プログラム策定において必要となる情報の収集・共有に対してネガティブな影響を与えていることである。この知識や理解の欠如からくる問題は、情報を提供する住民側でのみ起こることではなく、情報を収集する行政側でも起こっている（2007）。

2点目は、個人情報を扱うことによって避難支援の担い手が、必要以上の責任や負担、法的制裁を受けるのではないかとといった不安を背負うことになるという点である。

これは、避難支援の担い手となる人を減少させるという問題につながってくる。

本研究の目的は、災害時に一人でも多くの命を救えるよう、災害時要援護者個別避難支援プログラムの策定を進めるために、どのように働きかければ良いのかを検討することである。上記のように、災害時要援護者の個別避難支援プログラム策定には、個人情報にまつわる問題が必ず付きまとう。しかし、個人情報の取り扱いについては、国による『個人情報保護法』だけではなく、都道府県や市町村などの行政単位による『個人情報保護条例』に基づいている。つまり、自治体における個人情報の取り扱い方は自治体の数だけ存在し、それに基づいて行われる災害時要援護者の情報収集・共有の方法も千差万別である。そこでまず、本研究の対象地域である京都府精華町における個人情報保護条例や、平常時からの個人情報共有の現状について検討を行う。

## 1. 先行研究

### 1-1. 精華町の現状

京都府精華町での災害時要援護者の個別避難支援プログラム策定の動きは、平成19年から始まった。精華町では『精華町災害時要配慮者登録制度実施要綱』（以下、『要綱』）を平成19年に策定し、それに基づいて福祉課が「災害時要配慮者台帳システム」（以下、「台帳システム」）を整備し、それをを用いて災害時要援護者およびその可能性のある方の「母集団リスト」を作成し、さらに個別に同意や手上げをしてもらうことで「災害時要配慮者登録台帳」（以下、「登録台帳」）に必要な情報を登録・共有し、個別避難支援計画の策定を行っている。精華町が策定した「災害時要援護者（要配慮者）の認

表1 精華町による「災害時要援護者（要支援者）の認定基準」

	基準の内容
1)	介護保険法（平成9年法律第123号）に基づく要介護認定結果が3, 4または5と判定された者
2)	ひとり暮らしで満65歳以上の者
3)	満65歳以上の高齢者のみの世帯
4)	満3歳以下の乳幼児を抱えている者
5)	母子手帳の交付を受けている者
6)	身体障害者福祉法施行規則（昭和25年厚生省令第15号）の別表第5号による障害程度等級が1級, 2級に該当する者
7)	知的障害者福祉法（昭和35年法律第37号）に規定する知的障害者更生相談所の判定の結果がA判定に該当する者
8)	精神障害者のうち、精神保健及び精神障害者福祉に関する法律施行令（昭和25年政令第155号）第6条第3項による障害程度等級が1級, 2級及び3級に該当する者であって、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けた者
9)	小学生以下の児童を抱える母子家庭又は父子家庭の者
10)	前各号に掲げる者に準じる状態にある難病患者その他の者

定基準」(以下、「認定基準」)は、表1の通りである。現段階では、「登録台帳」に登録された方、1,326名のうち、避難支援が必要だと判断された方については、個別避難支援計画の策定及び情報の共有が完了している状態である。

「登録台帳」及び「母集団リスト」の作成の流れについて説明する。まず広報誌に、「登録台帳」に関する広報を掲載し、手上げを募った。それと同時に、「認定基準」のうち福祉課からのダイレクトメールや、保健所や保健師の訪問時のチラシ配布で手上げを募った(手上げ方式)。さらに、民生児童委員(以下、民生委員)が所有する福祉票を用いて、民生委員が直接訪問し、「登録台帳」の説明および同意取得を行った(同意方式1回目)。

上記の手上げ方式や同意方式を行うのと同時に、行政内部で「認定基準」を満たす住民全員のリストとなる「母集団リスト」の作成が開始された。「母集団リスト」作成のため、他の課から一部個人情報開示を行った。この個人情報開示は、『精華町個人情報保護条例施行規則』(以下、『施行規則』)によって、内部決済のみで行われた。

「台帳システム」作成後、手上げ方式と同意方式の結果を「台帳システム」と照らし合わせたものを民生委員にフィードバックし、手上げも同意もしていないが民生委員として気がかりな方について再度同意を取るため訪問を行ってもらった(同意方式2回目)。この2回目の同意方式が完了したのが平成23年である。つまり精華町における要援護者台帳は、「認定基準」から網羅的にリストアップされた町民すべてが載っている「母集団リスト」と、情報の開示に同意した方が載っている「登録台帳」の2つの台帳が存在しているのである。

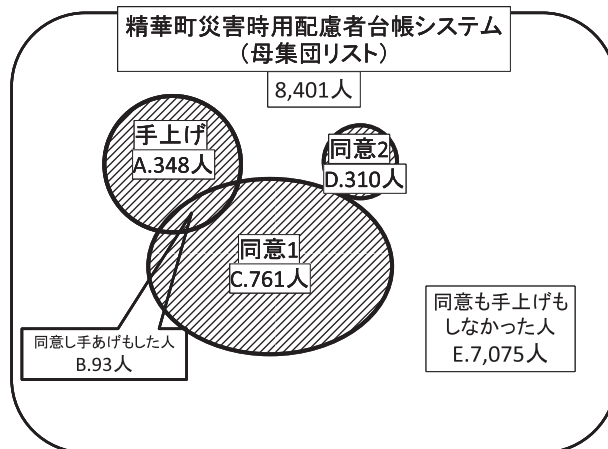


図1 精華町災害時要援護者情報システム

上記のように、精華町での「登録台帳」作成は、手上げや同意方式による本人同意を中心に行っており、平常時での情報の収集や共有がとりわけスムーズに行われている

けではない。『施行規則』によって行政内部での情報開示は比較的スムーズにできる状況であるが、外部機関への情報提供には慎重である。ゆえに、福祉課が統制を行っている民生委員のみが、同意を取りに行くために動いている唯一の組織である。精華町での「登録台帳」作成方法は、主導は市町村行政であるが、行政が持つ情報を元にした手上げ方式と、民生委員の持つ福祉票を元にした同意方式がほぼ同時期に平行して行われていた点と、行政内部及び民生委員と関係機関共有方式を用いて情報の収集・共有を行っていた点から、山崎ほか（2011）の表2「存在情報（確認前・確認後）の収集・共有パターンの解説」における III-2「存在情報（確認前）をもとに市町村が本人にアプローチ 本人同意を得て地域に提供」と V「市町村による情報提供によらずに地域が独自に本人アプローチ」の混合パターンであると言える。

内閣府のガイドライン（2006）では、災害時要援護者の個人情報収集について、関係機関共有方式、同意方式、手上げ方式の3つをあげている。個人情報保護条例を気にせず要援護者の個人情報を収集するには、要援護者自身に自ら情報提供に同意もしくは手上げしてもらうことが簡便である。

災害時要援護者が自身の個人情報提供に同意するという事は、自ら周りに援助を求める行為の一つである。米国では、自ら周りに援助を求める *help-seeking* という概念があり、日本ではそれを基礎にして〈被援助志向性〉という概念について研究が行われている。そこで *help-seeking* や被援助志向性に関する議論を検討する。

## 1-2. 被援助志向性

水野治久・石隈利紀（1999）が自ら周りに援助を求める *help-seeking* という概念を〈被援助志向性〉と翻訳し、その定義を「個人が情緒的、行動的問題および現実生活における中心的な問題で、カウンセリングやメンタルヘルスサービスの専門家、教師などの職業的な援助者および友人・家族などのインフォーマルな援助者に援助を求めるかどうかについての認知的な枠組み」としている。水野・石隈（1999）によると、被援助志向性に影響を及ぼす要因は、1）性差や年齢、教育レベルや収入、文化的背景（Good et al. 1998）などのデモグラフィック要因（Halgin et al. 1987）、2）ソーシャルサポートや事前の被援助体験の有無などのネットワーク変数（Fisher et al. 1982）、3）自尊心、自己開示などのパーソナリティ変数（Fisher et al. 1982）、4）個人の問題の深刻さ、症状（Rockwood & Braothwait 1994）の4種類に分けられる。

また、高木修・妹尾香織（2006）らは、日頃から他者に援助を提供している人は、被援助者の立場でも他者に援助を求め、援助を受けていることを明らかにしている。また、同じく妹尾・高木（2011）は援助成果志向性が高い人ほど他者援助を通じて、相手も自分も得るものがあつたと肯定的な心理効果を得やすいとしている。

さらに脇本竜太郎（2008）は、被援助志向性及び援助要請回数に対する自尊心の高低が、不安定性の程度によって調整されると述べている。自尊心が安定している場合は、自尊心が高いほど被援助志向性と援助要請回数に正の効果を与え、自尊心が低いほど負の効果と及ぼす。逆に自尊心の高さが不安定な場合、自尊心の高さにかかわらず負の効果と及ぼすとしている。

### 1-3. 災害時要援護者のスクリーニング

次に災害時要援護者を対象とした要援護者スクリーニングに関する研究として、星ほか（2007）があげられる。星ほか（2007）は、災害時要援護者のスクリーニング基準と、災害時の一時避難の可能性を高める対策について検討を行うため、高齢者への質問紙調査を行った。対象者は大都市郊外に住む65歳以上の高齢者20,938人であり、本人以外が回答したのもも含め回答票は13,460票（回収率=64.3%）で、分析には在宅居住者のみを用いた。結果スクリーニング基準としては、要介護度や一人暮らし、日用品の買い出しが自分でできるかどうかなどがあげられている。しかし対象者が高齢者に限られている点と、従属変数である災害時の避難行動の可能性について回答者自身の主観的な回答を用いている点が、課題点として指摘できる。

### 1-4. 目的と意義

本研究の目的は、まず民生委員への質的調査から個人情報提供に同意する人と同意しない人の特徴について探ることで、同意する人と同意しない人に分かれる要因仮説を作成することである。さらにその結果を、災害時要援護者を対象とした計量調査によって一般化する。対象となる災害時要援護者は、対象地域である京都府精華町の「母集団リスト」を用いている。前述の星ほか（2007）と比較すると、1) 対象が65歳以上の高齢者のみであったが、本研究では障害者や妊産婦、子どもも含まれている点と、2) 災害時の要援護性の判断が対象者個人の主観的規準ではなく、行政による客観的規準で選別されている点で異なっている。本研究の意義は、同意する・同意しないに影響を与える要因を探り出すことで、今後の避難支援計画策定を進めるにあたって個人情報提供を促し、個人避難支援プランの策定・実行を潤滑に進めていく一助となることである。

## 2. 研究1：民生委員を対象としたワークショップ

### 2-1. 方法

#### 2-1-(a). 調査対象と調査概要

調査対象者は、京都府相楽郡精華町の民生委員15名である。事前に希望者を募り、

精華町内の各地域から最低1人は代表者として参加した。15名のうち、男性は7名、女性は8名である。日時は2012年5月24日、場所は精華町役場の会議室で行った。

### 2-1-(b). 調査方法

実施したワークショップはKJ法ワークショップである。精華町は1) 既存住宅地域(農業を中心した産業で発展した地域で、本来の精華町を構成している地域)、2) 新興住宅地域(関西文化学術研究都市に位置づけられた開発地域)、3) 災害危険地域(洪水、地滑り、土砂崩れの危険性がある地域)の3地域に分けられる。民生委員には、担当地区がどの地域に分類されるかによって3つの班に分かれていただき、ワークショップを行った。

要援護者の個人情報提供について「同意する要援護者」および「同意しない要援護者」の特徴について話し合い意見をポストイットカードに明記し、カードのグループ化を行い、カードグループには内容を適切に代表するタイトルカードを作成した。その後各班ごとの作成されたタイトルカードを全体で集約し、グラウンドKJ法(本荘・立木2012)によって再整理を行った。その後、グラウンドKJ法により抽出された上位のタイトルカードの内容について、その重要性を投票(一人持ち点3票)によって決定した。

## 2-2. 結果

### 2-2-(a). 個人情報提供に同意する要援護者の特徴

ワークショップにより発見された同意する要援護者の特徴は表2左側の通りであり、15種類の特徴が抽出された。まずもっとも得票数が多かったのは、「1) 民生委員との間に信頼関係ができています」という特徴で、13票獲得した。この特徴は「民生委員さんに対して信頼がある」、「すでに何らかの形で行政にお世話になったことのある方」などの意見から作成された。次に「2) 障害があり体が不自由である」という特徴が11票を集めた。この特徴は、「自分で動けない何らかの障害をもっている」、「配偶者が体が不自由な方」、「障害児をもつ母親」などの意見から作成された。次は「3) 一人暮らし」という特徴が、10票を集めた。この特徴は、「一人暮らしの方」、「身内(家族)がいない」、「家族がいるがお昼に一人の方」などの意見から作成された。次の「4) 個人情報にオープンでマップ作成に理解のある方」という特徴は、5票獲得した。この特徴は、「メリット・デメリットを把握」、「マップ作成について理解のある方」などの意見から作成された。「5) よくコミュニケーションをとる人」という特徴は、2票獲得した。この特徴は、「積極的に人とかわる方」、「いろんなサークルや習い事に参加」などの意見から作成された。次の「6) 高齢者」という特徴も、同じく2票獲得した。この特徴は、「高齢者夫婦で片方の体調が悪くなったら」、「高齢者のみ夫婦世帯」などの意見から作成された。次の7)と8)の特徴は、獲得票数が1票であった。「7) つきあいが少

表2 民生委員ワークショップによる同意者・不同意者の特徴

特徴	同意者		票数	地域分類	11) ライフワークが作成できている 将来がどうなるかかたと自分のことをきちんと考えている人 自分自身のライフワークの作成ができている	0	新興 新興
	特徴	具体的な意見					
1) 民生委員との間に信頼関係ができている	13	新興 新興 新興 新興 新興 新興 新興	13	地域分類	12) 災害に対して危機感があり、安心していききたい人 家族と同居でも案内をみて興味をもった人 安心して生きたい 災害に対する危機感を持っている人	0	災害 災害 災害
2) 障害があり体が不自由である	11	災害 災害 災害 災害 新興 既存 既存 災害	11	地域分類	13) チラシや広報を見られる人 よくチラシや広告を見られる方 広報誌をよく読んでいる方	0	既存 既存
3) 一人暮らし	10	新興 既存 新興 新興 新興 災害 災害 災害 新興 既存 既存 災害	10	地域分類	14) 社会的地位が高かった人	0	既存
4) 個人情報にオープンでマップ作製に理解のある方	5	既存 既存 新興 新興 新興 新興	5	地域分類	15) 女性	0	災害
5) よくコミュニケーションをとる人	2	災害 災害 新興 新興 新興 新興 既存 既存	2	地域分類	不同意者		
6) 高齢者	2	新興 新興 災害 災害 災害 災害 災害	2	地域分類	1) 個人情報を知られたくない	10	新興 新興 新興 新興 新興 災害 災害 災害
7) 付き合いが少なく頼れる人が少ない	1	新興 新興	1	地域分類	2) 人間不信の人	8	災害 災害 既存 既存 既存 既存
8) 乳幼児がいる	1	新興 新興	1	地域分類	3) 自分のことを元気で大丈夫だと思っている	6	既存 既存 既存 既存 既存 既存 新興 新興 新興 新興
9) 家族が防災に関心がある	0	既存 既存	0	地域分類	4) 助けてくれる家族が近くにいる	6	既存 既存 既存 既存 災害 災害 新興
10) 素直で心にゆとりがある	0	災害 災害 災害 災害	0	地域分類	5) 頑固でプライドが高い	5	災害 災害 災害 災害



	家族が不在の時間帯は民生委員のお世話になりたいが、普段面倒を見てもらっている家族に対し遠慮してしまう	新興	民生委員さんを知らない人 訪問しても留守の人	災害 災害
7)	災害に対して楽観的 災害に対して楽観的 山の裾に住んでいる方(地滑りが想定されているので) 自分が災害にうちを考慮していない 住んでいるところが安全だと思っている 災害に対して楽観的	2	10) 金銭的に余裕がある 比較的、金銭的に余裕があり、業者などに頼む	0
8)	民生委員への信頼不足 本当に助けてもらえるの・・・?と不安 行政への不信感がある	2	11) 身内に被災者がいない 身内に被災者がいない 12) 周りから心配された人 近所から心配だというわさが聞こえてきた人 民生委員さんが直接説得(アドバイス)して加入した方	0 災害 災害
9)	訪問しても留守の人 元気で一人暮らしのおじいさん。モーニング一杯飲む 民生委員さんのカードをポストに入れても(メッセージ TEL、訪問しても)返ってこない	1	13) 広報などを見られず情報を知らない 14) 芸術家気質で絵をかいたりする人 15) 孫の世話などを近くに住む娘夫婦に頼まれる 16) 男性	0 0 0 0

なく頼れる人が少ない」という特徴は、「(新興住宅に多いが)気の知れていない人の世話になるのは気が引ける方」,「家族が頼りにならない」などの意見から作成された。「8) 乳幼児がいる」という特徴は、「3才未満の子供がいる」,「乳幼児をお持ちの母親は自ら進んで申請される」という意見から作成された。9) から 15) までの特徴は、獲得票数が 0 票であった特徴である。「9) 家族が防災に関心がある」という特徴は、「家族の方が防災について関心がある」,「自分の娘にすすめられた人」という意見から作成された。「10) 素直で心にゆとりがある人」という特徴は、「素直な方」,「ゆとりがある人」などの意見から作成された。「11) ライフワークが作成できている」という特徴は、「将来どうなるかなと自分のことをきちんと考えている人」,「自分自身のライフワークが作成できている」という意見から作成された。「12) 災害に対して危機感があり、安心して生きたい人」という特徴は、「案内を見て興味を持った人」,「災害に対する危機感を持っている方」などの意見から作成された。「13) チラシや広報誌を見られる方」という特徴は、「よくチラシや広告を見られている方」,「広報誌をよく読んでいる方」という意見から作成された。「14) 社会的地位が高かった方」および「15) 女性」の 2 つの特徴については、意見カード一枚で 1 つの特徴として成り立っていたため、意見の内容をそのまま特徴の名称とした。

## 2-2-(b). 個人情報提供に同意しない要援護者の特徴

同意しない要援護者の特徴は表 2 右側のとおりであり、16 種類の特徴が抽出された。最も得票数が高かったのは「1) 個人情報を知られたくない」という特徴で、10 票獲得した。この特徴は、「個人情報のろうえいを恐れる」,「自分のことをあまり他人さんに知られたくない」,「個別計画を書くのがイヤ」などの意見から作成された。次に 8 票の得票を集めたのは、「2) 人間不信の人」という特徴である。この特徴は、「閉鎖的な人」,「あまり話さない人」などの意見から作成された。「3) 自分のことを元気で大丈夫だと思っている」という特徴は 6 票獲得した。この特徴は、「自分は若いという気持ちが強い方」,「周りに元気な人が多い」,「気持ちが若く人を助けたい人」などの意見から作成された。同じく 6 票獲得したのは、「4) 助けてくれる家族が近くにいる」という特徴である。この特徴は、「身内が近所にいる」,「頼れる家族がいる」などの意見から作

成された。次の「5) 頑固でプライドが高い」という特徴は、5票獲得した。この特徴は、「頑固である」、「プライドが高い」などの意見から作成された。次の「6) 人に迷惑をかけたくない」という特徴は4票を獲得した。この特徴は、「家族への遠慮」、「行政に面倒はかけたくない」などの意見から作成された。「7) 災害に対して楽観的」という特徴は、2票を集めた。この特徴は、「自分が災害にあうことを考えていない」などの意見から作成された。同じく「8) 民生委員への信頼不足」という特徴は、2票を集めた。この特徴は、「本当に助けてもらえるの?という不安」、「行政への不信感がある」という意見から作成された。「9) 訪問しても留守の人」という特徴は、1票の表を獲得した。この特徴は、「民生委員さんのカードをポストに入れても（メッセージとTEL訪問しても）返ってこない」、「民生委員さんを知らない人、訪問しても留守の人」などの意見から作成された。10) 以降の特徴は、すべて獲得票数が0票であった。「10) 金銭的に余裕がある」と「11) 身内に被災者がいない」は、意見構成された。「12) 周りから心配された人」という特徴は、「近所から心配だといううわさが聞こえてきた人」、「民生委員さんが直接説得（アドバイス）して加入した方」という意見から作成された。「13) 芸術家肌で絵を描いたりする人」、「14) 広報などを見られず情報を知らない」、「15) 面倒で文章を読んでいない人」、「16) 男性」という特徴は、意見カード一枚で構成された特徴であり、意見の内容がそのまま特徴の名称になった。

### 2-3. 成果物：個人情報提供への同意・手あげに影響を与える要因仮説

ワークショップで得られた結果（表2）を持ち帰り、内容を精査した。精査には、同志社大学社会学部の調査実習のクラスに参加していた12名の学生と、ティーチングアシスタントをしていた院生2名に協力していただいた。精査の方法としてはまず、同意者・不同意者どちらの特徴であっても、似た内容の特徴は一つにまとめた。例えば、同意者の特徴である「12) 災害に対して危機感があり、安心して生きたい人」と「7) 災害に対して楽観的」は、方向性は逆であるが本質的には同じ内容であるため、一つの特徴としてまとめられると考えた。次に、同意者の特徴である「15) 女性」と不同意者の特徴である「16) 男性」については、属性変数（先行研究で言うところのデモグラフィック要因）であるため、「性別」としてまとめた。さらに、一枚の意見で構成された特徴、獲得票数が0票だったもののうち、前述の先行研究と照らし合わせ、先行研究で言及されている内容であれば残し、それ以外を削除した。このように精査した結果、個人情報提供への同意・手あげに影響を与える要因仮説として「1) 自分のことを元気で大丈夫だと思っている」（以下、「元気な人」）、「2) 個人情報を知られたくない」（以下、「知られたくない」）、「3) 閉鎖的で人に干渉されるのが嫌で、周りに無関心な人」（以下、「閉鎖的な人」）、「4) 助けてくれる家族が近くにいる」（以下、「家族が近い」）、「5)

人に迷惑をかけたくない」(以下、「迷惑かけたくない」), 「6) 民生委員への信頼不足」(以下, 民生委員信頼不足), 「7) 周りから心配された人」(以下, 「周りから心配」), 「8) 災害に対して楽観的である」(以下, 「楽観的な人」), 「9) 民生委員の活動に認識・接点があるため信頼している」(以下, 「民生委員信頼」), 「10) 自分を含め, 家族の中に障害があり, 体が不自由な人がある」(以下, 「障害不自由」), 「11) 一人暮らしや昼間独居の高齢者と高齢者夫婦」(以下, 「独居・昼間独居」), 「12) 社会的でよくコミュニケーションをとり, 人と関わる方」(以下, 「社会的な人」) の, 12 の下位概念が得られた。上記の内, 1~8 の要因は同意・手上げに対して負の影響を, 9~12 の要因は, 正の影響を与えると考える。

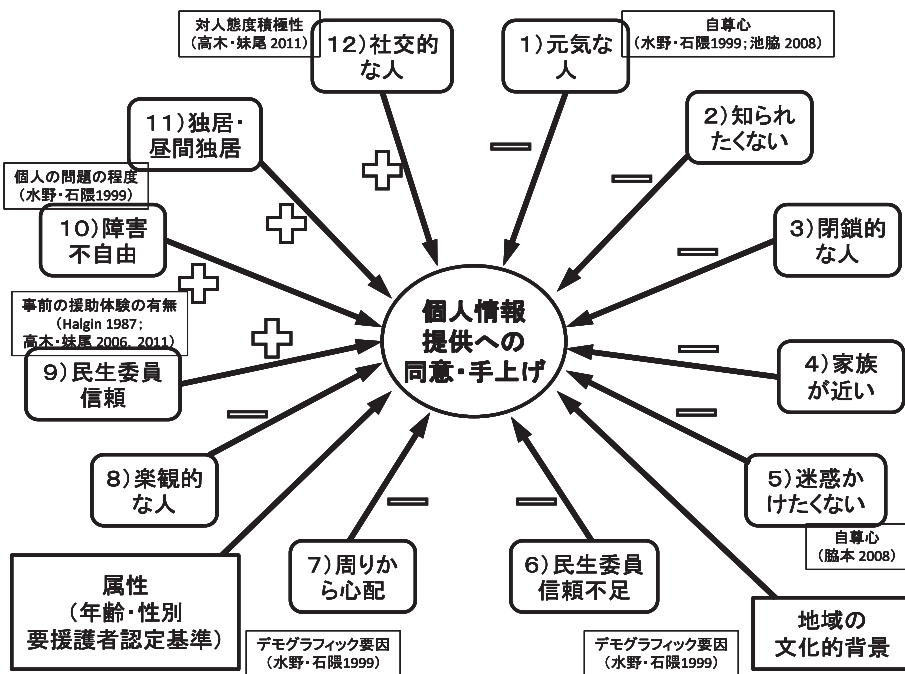


図2 個人情報提供への同意・手あげに影響を与える要因仮説

上記のとおり, 先行研究におけるデモグラフィック要因として, 性別, 地域の文化的背景及び精華町が策定した「認定基準」のカテゴリについても仮説に加えた。これら全てをまとめて, 個人情報提供への同意・手あげに影響を与える要因仮説とした (図2)。

### 3. 研究2：要援護者を対象とした質問紙調査

#### 3-1. 方法

##### 3-1-(a). 調査母集団

本研究の対象者を抽出する母集団は、精華町が作成した「母集団リスト」である。全対象者は8,401名であり、うち「登録台帳」に登録済みである同意もしくは手上げをした人(1,326人)のリストと、「登録台帳」に未登録の同意も手上げもしなかった人(7,075人)のリストがある。本研究において前述の災害時要援護者情報システムを用いて調査対象を抽出することに関して、特筆すべき点が2点ある。1点目は、行政が策定した要援護者認定基準にもとづいて抽出された、精華町内の要援護者の母集団リストを抽出元としている点である。2点目は、精華町の要援護者認定基準には高齢者だけではなく、3歳以下の乳幼児や妊産婦も含まれているという点である。

##### 3-1-(b). 調査標本

本調査では、前述の「母集団リスト」のうち、個人情報提供について同意もしくは手上げた方（以降、同意・手上げた者とする）について、図1で示した  $A+C-B+D=1,326$  名を母集団として、960名を抽出した。次に個人情報提供に対して同意も手上げもしなかった方（以降、同意も手上げもしなかった者とする）7,075名を母集団とし、2,040名を抽出し配布対象者とした。抽出方法であるが、精華町に15ある大字すべてにおいて偏りがないうように抽出するため、すべての認定基準の項目について各地域から人口比率にそって抽出されるよう、地域ごとの年齢比率による層化抽出法を用いた。さらに障害者手帳の保持者など、地域によっては母数が著しく少ないカテゴリーの場合は、回収率がおおよそ4割程度になることを考え、すべてのカテゴリから回収できるよう最低3名が配布対象となるよう抽出数を調整した（有効票=1,330、有効回収率=45.1%）。

##### 3-1-(c). 下位概念の尺度開発

調査票作成にあたり、民生委員へのワークショップで得られた同意者・不同意に影響を与える要因仮説（図2）をもとに、各下位概念を測る予備尺度を、構成概念妥当かパラダイム用いて作成した（Loevinger 1957）。予備尺度の作成に当たって、再度上記の調査実習の学生12名に協力してもらった。全ての下位概念について、各学生3~4問ずつ、計767問の質問項目を作成してもらい、これらを本調査項目のアイテムプールとした。その後、アイテムプールのすべての質問項目について、どの下位概念の予備尺度として作成されたものを伏せた上で、各項目がどの下位概念を示しているか逆方向のマッチングを行った。さらにもっとも伝達性の高い項目を選択するため、どの質問項目がより下位概念の内容を伝達しているか、逆マッチングした下位概念ごとに投票を行った。

表3 下位概念および質問項目

下位概念	No	質問項目	変数名
自分のことを元気で大丈夫だと思っている	1	何か問題が起きても、対応できる	元気
	2	自分の身の回りのことは、自分でできる	
	3	私は今、元気だと思う	
	4	現在仕事をしている（パート、アルバイト含む）	
	5	私は、いざという時、他人を助ける立場だと思う	
	6	自分はしっかりしていると思う	
個人情報を知られたくない	7	自分のことを他人に知られたくない	知られたくない
	8	写真を撮られるのは嫌いだ	
	9	個人情報の悪用が怖い	
	10	自分のことを他人に話すのは嫌だ	
閉鎖的で人に干渉されるのが嫌で、周りに無関心な人	11	私は町内のことをあまり知らない	閉鎖的
	12	私は、人に話しかけるのが苦手である	
	13	よく人から頑固だと言われる	
	14	他人に干渉されるのは嫌だ	
	15	私は、疑い深いほうだ	
助けてくれる家族が近くにいる	16	同居している家族がいる	家族近い
	17	近くに（同じ町内に）助けてくれる人がある	
	18	家族（親戚）が近くに住んでいる	
人に迷惑をかけたくない	19	自分でできることは自分でしたい	迷惑かけたくない
	20	私は、他人に迷惑をかけたくない	
	21	他人のお世話になるのは嫌だ	
	22	民生委員のお世話にはなりたくない	
民生委員への信頼不足	23	近所に頼る人はいない	民生委員信頼不足
	24	近所の人とのかかわりは少ない	
	25	民生委員とのかかわりは少ない	
	26	行政は信頼できない	
周りから心配された人	27	私は、人から気遣われることが多い	周りから心配
	28	私は、家族に身体のことをよく心配される	
	29	私は、安全なところに住んでいる	
災害に対して楽観的	30	災害は、起きてから考えれば良い	楽観的
	31	自分が災害にあうことは想像できない	
	32	いざという時、どこに逃げれば良いか知っている	
	33	民生委員には個人情報を見ても良い	
民生委員の活動に認識・接点があるため信頼している	34	民生委員を信頼している	民生委員信頼
	35	民生委員の活動内容を知っている	
	36	私は行政の支援や助成を受けたことがある	
	37	私は民生委員と仲が良い	
	38	何かあったとき、私は家族を助けられない	
自分を含め、家族の中に障害があり、体が不自由な人がある	39	自分ひとりでは動けない	障害不自由
	40	体に不自由がある	
	41	何かあったとき、私は他人の助けが必要だ	
	42	高齢者のみの世帯である	
一人暮らしや昼間独居の高齢者と高齢者夫婦	43	昼間は家で一人であることが多い	独居
	44	一人暮らしである	
	45	乳幼児、妊産婦がいる世帯である	
社会的でよくコミュニケーションをとり、人とかかわる方	46	よく友人と一緒に出かける	社会的
	47	私は、自分から人とかかわる方だ	
	48	性格は明るい方だ	
	49	人と話すのが好きだ	
	50	私は、友人が多い	
	51	私は、チラシや広報をよく見る	
	52	性格は素直だと思う	
	53	近所の人と仲が良い	

マッチングし、かつ過半数である7票以上を獲得した項目を採用した(表3)。予備尺度の回答は「1. 当てはまらない」から「5. よく当てはまる」や「1. そう思わない」から「5. そう思う」など、5件法を用いてライカート尺度値化した。

質問紙では53の予備尺度のほかに年齢、性別、いざという時頼りになる人の居住地、居住地の郵便番号、家族構成、現在の自身や家族の状況(以降、要援護者カテゴリとする)といった属性項目を用いた。いざというときに頼りになる人の所在については、1. 同居している、2. 隣・近所、3. 学区内、4. 町内、5. 町外の選択肢で答える項目である。家族構成については、1.1人世帯、2. 夫婦だけ(1世代)、3. 自分(たち)と子ども、または、親と自分(たち)(2世代)、4. 親と子と孫(3世代)、5. その他、の選択肢で答える項目である。要援護カテゴリについては、1. 障害者手帳や療育手帳、精神障害者保健福祉手帳を持っている、2. 要介護認定を受けている、3. 3歳未満の子どもがいる、4. 子どもを保育園に預けている、5. 現在、妊娠している、6. ホームヘルパーを利用している、7. デイサービスを利用している、8. ショートステイを定期的にご利用している、について当てはまるものすべてを選ぶ複数回答とした。

本研究における従属変数は、個人情報提供に同意・手上げたか、同意も手上げもしなかったかである。その変数は、精華町の要援護者情報システムと照らし合わせて、A, B, C, D から抽出された同意・手上げたをした回答者か、E から抽出された回答者が同意も手上げもしなかった回答者かを変数として用いた。

### 3-1-(d). 下位概念の変数化

変数を作成するに当たり、12の下位概念から作成された項目について因子分析を行った。災害時の個人情報提供への同意・不同意に関する研究は現在あまり行われておらず、本研究は探索的な研究と位置づけられる。そのため、分析に使用可能な変数を作成する必要があり、そのためには変数をさらに精製する必要があると考えた。そこで因子分析の結果から、因子負荷量が絶対値.35に満たないもの、複数の因子で絶対値.35以上の負荷量を示しているもの、共通性が同一因子内のほかの項目に比べて著しく低いもの(.3以上低くなっているもの)については分析から除外し、因子分析を繰り返し行った。

属性変数のうち、年齢については、0歳を乳児、1~6歳を幼児、7~15歳を小中学生、16~64歳を生産年齢人口、65~74歳を高齢者、75歳以上を後期高齢者とし、年齢カテゴリーを作った。また、回答者の居住地の郵便番号を精華町による3つの地域分類に沿って分類し、地域分類変数を作成した。被援助志向性に関する先行研究やワークショップで得られた民生委員の実感から、本研究における仮説モデルを作成した(図2)。

### 3-1-(e). 分析方法

分析方法としては各独立変数が持つ効果について見当を行うため、ロジスティック回

帰分析を用いる。ソフトウェアは、IBM SPSS Statistic ver.21 を使用する。

### 3-2. 結果

#### 3-2-(a). 記述統計

##### ①年齢カテゴリ

図3は、回答者の年齢カテゴリーの分布である。乳児が1%、幼児が5.1%、小中学生が0.5%、子育て中の親が7.7%、高齢者が43%、後期高齢者が41.8%、不明が0.8%となった。

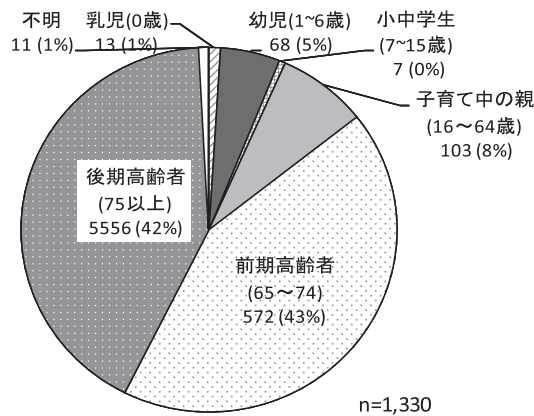


図3 年齢カテゴリーの分布

##### ②性別

表4 性別の分布

性別	度数	パーセント
男	689	(51.8)
女	629	(47.3)
有効回答の合計	1318	(99.1)
不明	12	(0.9)
合計	1330	(100.0)

次に性別についてである。表4を見ると、回答者のうち、男性が51.8%、女性が47.3%となっており、男性のほうが若干多いことが分かった。

##### ③頼りになる人の居住地

表5は頼りになる人の居住地、つまり調査票回答者の頼りになる人がどこに住んでいるの分布である。回答の選択肢としては、回答者に近い方から、同居、隣近所、学区内、町内、町外という5つのカテゴリーについて、複数回答可とした。表5を見てみると、半数以上の人同居しており、次いで町外が26.7%、隣・近所が16.0%、町内が

14.5%，学区内が 1.7% となっていた。

表 5 頼りになる人の居住地の分布

	あり	なし	不明	合計
同居	682 (51.3)	647 (48.6)	1 (0.1)	1330 (100.0)
隣・近所	213 (16.0)	1115 (83.8)	1 (0.1)	1330 (100.0)
学区内	23 (1.7)	1306 (98.2)	1 (0.1)	1330 (100.0)
町内	193 (14.5)	1136 (85.4)	1 (0.1)	1330 (100.0)
町外	355 (26.7)	974 (73.2)	1 (0.1)	1330 (100.0)

#### ④地域分類

次に回答者自身の居住地域の分布をみる。前述の通り，精華町は 1) 既存住宅地域，2) 新興住宅地域，3) 災害危険地域の 3 つに分類できる。今回の調査の回答者のうち，既存住宅地域の回答者は 3.5%，新興住宅地域の回答者は 41.1%，災害危険地域の回答者は 51.2% であるとわかった。既存住宅地域在住の回答者が少ないのは，既存住宅地域の多くが同時に災害危険地域に分類されるからである。本研究では災害時に備えた個人情報提供への意識についての研究であるため，災害危険地域への分類を優先した。

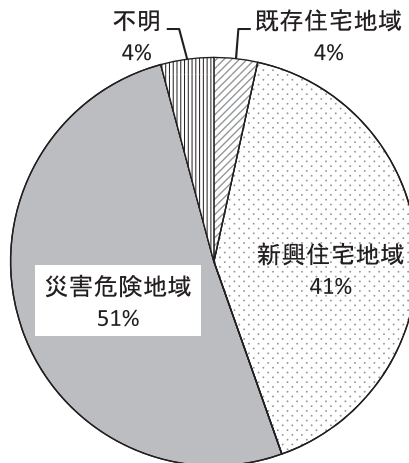


図 4 回答者の居住地域の分布

#### ⑤家族構成

次に，家族構成の分布を示したものが図 5 である。図 5 を見てみると，「夫婦だけ（1 世代）」世帯が 35% ともっとも多く 35.3% であり，次いで「自分（たち）と子ども，または，親と自分（たち）（2 世代）」世帯が 32%，「1 人世帯」が 16.0%，「親と子と孫



（3世代）」が11%と続いていた。

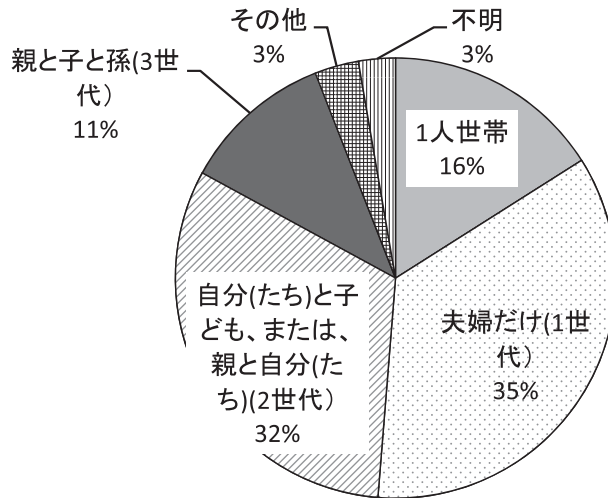


図5 家族構成の分布

#### ⑥要援護カテゴリ

表6は対象者の状況について、8つの要援護カテゴリを用いて複数回答可で質問した結果の分布である。表6を見ると、「障害者手帳や療育手帳、精神障害者保健福祉手帳を持っている」人は16.5%、「要介護認定を受けている」人が12.6%、「3歳未満の子どもがいる」人が10.2%、「デイサービスを利用している」人が9.4%、「ホームヘルパーを利用している」人が4.6%、「子どもを保育園に預けている」人が4.4%、「ショートステイを定期的に利用している」人が3.1%であった。

表6 要援護カテゴリの分布

要援護カテゴリー	いる	いない	合計
障害者手帳や療育手帳、精神障害者保健福祉手帳を持っている	220 (16.5)	1110 (83.5)	1330 (100.0)
要介護認定を受けている	168 (12.6)	1162 (87.4)	1330 (100.0)
3歳未満の子どもがいる	136 (10.2)	1194 (89.8)	1330 (100.0)
子どもを保育園に預けている	58 (4.4)	1272 (95.6)	1330 (100.0)
現在、妊娠している	10 (0.8)	1320 (99.2)	1330 (100.0)
ホームヘルパーを利用している	61 (4.6)	1269 (95.4)	1330 (100.0)
デイサービスを利用している	125 (9.4)	1205 (90.6)	1330 (100.0)
ショートステイを定期的に利用している	41 (3.1)	1289 (96.9)	1330 (100.0)

### 3-2-(b). 因子分析結果

変数を作成するにあたり、12の下位概念から作成された項目について、実証的に尺度化を試みるため、因子分析を行った結果が、表7である。抽出法は主成分法、回転はバリマックス回転を使用した。もともと53あった項目のうち、因子負荷量が絶対値.35に満たないもの、複数の因子で絶対値.35以上の負荷量を示しているもの、共通性が同一因子内のほかの項目に比べて著しく低いもの（.3以上低くなっているもの）であったため、項目4, 26, 32, 36, 51を分析から除外し、最終的に48項目から11の因子が抽出された。以下、各因子について見ていく。

第1因子では下位概念の「元気」から作成された5項目が正の負荷量を、「障害不自由」から作成された4項目が負の負荷量を示していた。よってこの因子を「元気」対「障害・不自由あり」因子とした。この因子は自尊心（Fisher et al. 1982）、個人の問題の深刻さ、症状（Rockwood & Braothwait 1994）および事前の援助体験の有無（高木・妹尾 2006）によって説明できる。自分を「元気」だと評価する人は自尊心が高く援助を求めにくく、「障害・不自由あり」の人は自身の問題について認識しており、これまでに援助を受けた経験があると考えられるため、援助を求めやすいといえる。

第2因子では、下位概念の「社交的な人」から作成された6項目が正の負荷量を、「閉鎖的な人」から作成された「私は、人に話しかけるのが苦手である」の項目が負の負荷量を示していた。よってこの第2因子を「社交的」対「話すの苦手」因子とした。この因子は対人態度の積極性（妹尾・高木 2011）によって説明できる。対人態度が積極的な人は自らの必要に応じて臆することなく援助を求め、また援助行動も進んで行うという、援助と被援助の好循環に寄与するからである。

第3因子では、下位概念の「人に迷惑をかけたくない」から作成された4項目が正の負荷量を、「周りから心配」から作成された「私は、人から気遣われることが多い」が負の負荷量を示していた。よってこの第3因子を「お世話になりたくない」対「心配される」因子とした。この因子は自尊心の概念で説明できる。人に世話になりたくないと考えている人は自尊心の高い人であり自分から援助を求めにくく、すでに周りから心配されている人は援助を求めることに対して自尊心が邪魔をしないと言える。

第4因子では「閉鎖的な人」から作成された5項目が正の負荷量を示していたため、閉鎖的因子とした。「自分のことを他人に話すのは嫌だ」と思っていたり「個人情報の悪用が怖い」人は、Fisher et al. (1982)によるプライバシー意識の高さによる被援助志向性への負の影響によって説明できる。

第5因子では、「民生委員信頼」から作成された4項目が正の負荷量を示していたため、民生委員信頼因子とした。この因子は、先行研究に基づいて作成された項目を含んでおらず、ワークショップの成果から得られた因子である。

表7 下位概念の項目の因子分析結果

	「元気」対「障害・不自由」	「社会的」対「話すの苦手」	「お世話になりたくない」対「心配される」	閉鎖的	民生委員信頼	「独居」対「同居」	「頼れる人が近くにいる」対「いない」	「頑固・疑り深い」対「素直」	不足 町内知らない・民生委員信頼	「心配される」対「心配する」	楽観的	共通性
39 自分ひとりでは動けない	-.822	-.060	-.160	-.010	-.023	-.004	.000	.035	.071	.035	.034	.715
01 何か問題が起きても、対応できる	.797	.166	.272	.028	.090	.063	-.025	.001	-.028	.149	.010	.774
41 何かあったとき、私は他人の助けが必要だ	-.791	-.027	-.165	-.022	.050	.030	.022	.027	.098	.124	-.008	.683
38 何かあったとき、私は家族を助けられない	-.779	-.045	-.113	.012	.061	.131	-.018	.017	.089	.042	.082	.660
05 私は、いざという時、他人を助ける立場だと思う	.769	.171	.093	-.006	-.008	-.097	.055	.009	-.082	.061	-.008	.652
06 自分はしっかりしていると思う	.769	.266	.247	.019	.034	.005	-.005	-.025	.021	.138	-.006	.744
02 自分の身の回りのことは、自分でできる	.763	.174	.327	.059	.062	.147	.001	-.015	.016	.112	-.001	.762
40 体に不自由がある	-.699	-.064	.139	-.027	.112	.042	-.027	.078	-.074	.322	-.073	.648
03 私は今、元気だと思う	.656	.181	-.148	-.004	-.077	-.036	.113	-.062	.263	-.215	.063	.628
49 人と話すのが好きだ	.045	.839	.017	-.116	.040	.029	.029	-.042	.077	-.061	.010	.735
50 私は、友人が多い	.204	.783	-.014	-.057	.049	.029	.153	-.069	-.124	-.012	.033	.706
47 私は、自分から人とかかわる方だ	.167	.777	.013	-.140	.059	.041	.128	-.012	-.174	-.012	-.022	.704
48 性格は明るい方だ	.100	.763	-.014	-.055	.071	.029	.029	-.001	.197	-.030	-.004	.683
46 よく友人と一緒に出かける	.409	.593	-.071	.029	.042	.067	.141	-.201	-.193	.007	-.007	.588
12 私は、人に話しかけるのが苦手である	-.133	-.592	-.098	.221	.034	-.045	-.024	.139	.276	.155	.100	.560
53 近所の人と仲が良い	.141	.570	.149	.044	.169	.013	.229	-.190	-.102	.128	-.017	.514
20 私は、他人に迷惑をかけたくない	.333	.103	.759	.074	.115	.118	.012	-.021	.060	.038	-.039	.737
21 他人のお世話になるのは嫌だ	.177	-.064	.741	.186	-.095	.060	.023	.076	-.030	-.019	.154	.663
19 自分でできることは自分でしたい	.415	.152	.645	.039	.118	.129	.030	-.033	.088	.051	-.073	.662
22 民生委員のお世話にはなりたくない	.179	.004	.611	.129	-.337	-.063	.035	.072	-.040	.084	.178	.587
27 私は、人から気遣われることが多い	-.373	.018	-.377	.012	.030	.066	.223	.066	.141	.365	.114	.507
10 自分のことを他人に話すのは嫌だ	.005	-.174	.084	.806	-.071	.057	-.031	.052	-.022	.063	.041	.705
07 自分のことを他人に知られたくない	.076	-.158	.116	.804	-.127	-.002	-.042	.050	-.019	.030	.061	.716
08 写真を撮られるのは嫌いだ	-.004	-.112	.097	.747	-.119	.060	-.086	.040	-.060	.000	.084	.618
09 個人情報の悪用が怖い	-.005	.097	-.025	.624	-.043	.012	.017	.075	.159	-.124	-.187	.484
14 他人に干渉されるのは嫌だ	.088	-.102	.178	.437	-.070	-.003	-.134	.437	.192	.146	.057	.516
34 民生委員を信頼している	-.075	.040	-.018	-.105	.848	.040	.048	-.106	.083	-.033	-.020	.762
33 民生委員には個人情報を見せても良い	-.092	.023	-.099	-.271	.752	-.001	.020	-.024	.152	-.051	-.044	.686
35 民生委員の活動内容を知っている	.059	.100	.122	-.067	.638	.030	.047	-.060	-.140	.163	-.041	.495
37 私は民生委員と仲が良い	.074	.144	-.059	.013	.630	.170	.076	.033	-.282	.165	.048	.572
44 一人暮らしである	-.041	.065	-.013	.045	.106	.908	.058	-.020	.008	-.027	.006	.849
16 同居している家族がいる	.007	-.045	.045	-.035	-.058	-.891	-.063	.048	.021	.070	.024	.815
43 昼間は家で一人であることが多い	-.130	.046	.208	.046	.021	.644	-.137	.051	.012	.181	.032	.535
42 高齢者のみの世帯である	.099	-.014	.181	.005	.108	.471	-.091	.015	-.121	.408	-.091	.474
17 近くに（同じ町内に）助けてくれる人がいる	.054	.190	.006	-.011	.090	-.027	.805	-.028	-.025	.045	.008	.699
23 近所に頼る人はいない	-.042	-.198	.081	.059	-.101	-.019	-.744	.054	.247	.061	.028	.684
18 家族（親戚）が近くに住んでいる	-.039	.002	.097	-.077	-.028	-.008	.736	.019	.087	.003	-.005	.568
24 近所の人とのかかわりは少ない	-.079	-.336	.081	.069	-.168	.045	-.560	.071	.431	-.022	.038	.668
13 よく人から頑固だと言われる	-.081	-.178	-.048	.016	-.057	-.090	.008	.748	.112	.147	.019	.646
15 私は、疑い深いほうだ	-.041	-.139	.111	.228	-.024	.041	-.058	.692	.001	-.111	-.017	.583
52 性格は素直だと思う	.113	.409	.118	.037	.139	-.079	-.042	-.499	.290	.106	.002	.567
11 私は、町内のことをあまり知らない	-.189	-.299	-.096	.085	-.062	.054	-.191	.122	.606	-.066	.117	.586
25 民生委員とのかかわりは少ない	.058	-.102	.140	-.001	-.460	-.186	-.178	-.001	.475	.011	-.007	.537
28 私は、家族に身体のことをよく心配される	-.345	-.078	-.135	.001	.072	-.025	.126	.078	.125	.655	.002	.616
45 乳幼児、妊産婦がいる世帯である	-.148	.037	-.354	-.010	-.123	-.182	.151	.090	.237	-.619	-.023	.668
31 自分が災害にあうことは想像できない	-.076	.019	.045	.066	-.044	-.047	-.051	.011	.015	-.065	.750	.586
30 災害は、起きてから考えれば良い	-.017	-.082	.027	-.054	-.093	.093	-.040	.121	-.074	.062	.734	.592
29 私は、安全なところに住んでいる	.097	.033	.074	.015	.118	-.102	.100	-.195	.281	.013	.536	.455
回転前の固有値	8.529	5.565	3.400	2.397	2.114	1.837	1.658	1.539	1.275	1.186	1.090	
素点でのクロンバックの α	.917	.863	.729	.782	.751	.751	.755	.556	.433	.247	.492	

第6因子では、「独居」から作成された3項目が正の負荷量を、「家族近い」から作成された「同居している家族がいる」が負の負荷量を示していた。よってこの第6因子を「独居」対「同居」因子とした。この因子も第5因子と同じく、先行研究に基づいて作成された項目を含んでおらず、ワークショップの成果から得られた因子である。

第7因子では、「家族近い」から作成された2項目が正の負荷量を、「民生委員信頼不足」から作成された2項目が負の負荷量を示していた。「民生委員信頼不足」からの2項目は、内容を見ると「近所に頼る人はいない」と「近所の人とのかかわりは少ない」であったため、この第7因子を「頼れる人が近くにいる」対「いない」因子とした。この因子も先行研究に基づいて作成された項目を含んでおらず、ワークショップの成果から得られた因子である。

第8因子では、「閉鎖的な人」から作成された2項目が正の負荷量を、「社交的な人」から作成された「性格は素直だと思ふ」が負の負荷量を示していた。よって第8因子を、「頑固で疑り深い」対「素直」因子とした。この因子も先行研究に基づいて作成された項目を含んでおらず、ワークショップの成果から得られた因子である。

第9因子では、「閉鎖的な人」から作成された「私は、町内のことをあまり知らない」と、「民生委員信頼不足」から作成された「民生委員とのかかわりは少ない」の2項目が正の負荷量を示していた。よって、第9因子を町内知らない・民生委員信頼不足因子とした。この因子も先行研究に基づいて作成された項目を含んでおらず、ワークショップの成果から得られた因子である。

第10因子では、「周りから心配」から作成された「私は、家族に身体のことをよく心配される」が正の負荷量を、「独居」から作成された「乳幼児、妊産婦がいる世帯である」が負の負荷量を示していた。この因子は、自身の身体に心配を抱えている場合と、家族内に心配すべき乳幼児や妊産婦がいる場合の両方に当てはまる。そこで、「心配される」対「心配する」因子とした。

最後に第11因子では、「楽観的な人」から作成された3項目が正の負荷量を示していた。よって第11因子は楽観的因子とした。

これら11因子について、尺度としての信頼性を検討するために、項目の素点を用いて信頼性分析を行った。その際負荷量が負の逆項目が含まれている因子があったため、その逆項目については得点を逆転させて分析に用いた。その結果が、表7の一番下の行である。クロンバックの $\alpha$ は、Nunnally (1978)の基準によれば、.72より大きい値である必要がある。本分析では因子内の項目数が少ないため、 $\alpha \geq .72$ を基準とした。 $\alpha$ が.72以下の「頑固で疑り深い」対「素直」因子、町内知らない・民生委員信頼不足因子、「心配される」対「心配する」因子と楽観的因子は、今後の分析から除外した。結果、ワークショップおよび先行研究をもとに作成された同意・不同意に対する独立変数は、

合計で7変数となった。この因子分析で得られた因子得点から7変数を作成し、回答者の属性変数とともに、ロジスティック回帰分析を行った。

### 3-2-(c). ロジスティック回帰分析結果

因子分析で作成した11の因子と「性別」、「頼りになる人の居住地」、「年齢」、「家族構成」、「地域分類」、「要援護カテゴリ」を説明変数、「個人情報提供への同意もしくは手上げをした、しなかった」を「した=1」、「しなかった=0」の2値変数として従属変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果が表8である。前述のすべての説

表8 ロジスティック回帰分析結果

	B	有意確率	Exp (B)	EXP (B) の95% 信頼区間	
				下限	上限
性別	.232	.205	1.261	.881	1.806
乳児ダミー	-1.348	.351	.260	.015	4.415
幼児ダミー	.026	.983	1.026	.093	11.286
後期高齢者ダミー	-.988	.399	.372	.037	3.704
生産年齢ダミー	.212	.861	1.236	.115	13.241
前期高齢者ダミー	-2.282	.052	.102	.010	1.016
既存住宅地ダミー	.524	.268	1.689	.668	4.268
新興住宅地ダミー	-.865	.000	.421	.301	.588
一人ダミー	0.863	.160	2.370	.711	7.900
夫婦ダミー	.199	.612	1.220	.566	2.629
3世代ダミー	-.848	.059	.428	.177	1.033
2世代ダミー	-.269	.498	.764	.352	1.662
頼りになる人・同居	-.574	.033	.563	.332	.956
頼りになる人・隣近所	.222	.421	1.249	.727	2.145
頼りになる人・学区内	-.254	.694	.775	.219	2.746
頼りになる人・町内	-.414	.156	.661	.374	1.170
頼りになる人・町外	.024	.930	1.024	.598	1.755
障害者手帳	.524	.022	1.688	1.078	2.645
要介護認定	-.350	.321	.705	.353	1.406
三歳未満の子持ち	-.799	.038	.450	.212	.956
子供保育園	-.476	.220	.621	.290	1.329
妊娠中	.333	.657	1.394	.322	6.043
ホームヘルパー	.484	.304	1.622	.645	4.083
デイサービス	.720	.072	2.054	.938	4.496
ショートステイ	-.657	.186	.518	.196	1.373
元気／障害・不自由	-.251	.021	.778	.628	.963
社会的／話すの苦手	-.001	.995	.999	.849	1.176
迷惑嫌／心配される	-.079	.394	.924	.772	1.108
閉鎖的	-.100	.222	.905	.771	1.062
民生委員信頼	.410	.000	1.507	1.276	1.779
独居／同居	.214	.234	1.239	.871	1.762
近くにいる／いない	.037	.691	1.038	.864	1.246
定数	1.111	.383	3.038		
-2 対数尤度					1003.359 <sup>a</sup>
Cox-Snell R2 乗					0.271
Nagelkerke R2 乗					0.368
Hosmer と Lemeshow の検定		$\chi^2$ 乗 = 6.802	df = 8		74.4%
的中率					p = 0.558

明変数を強制投入法によってモデルに投入した。「地域分類」, 「年齢カテゴリ」 および「家族構成」変数については, 項目ごとにダミー変数を作成して分析に投入した。有意であった結果(表内で網掛けされた部分)についてのみ述べる。

「新興住宅地ダミー」は  $\text{Exp}(\beta) = .421$  ( $p < .01$ ) となっており, 手上げや同意をしない方向への有意な効果が見られた。次に「頼りになる人・同居」について,  $\text{Exp}(\beta) = .563$  ( $p < .05$ ) となっており, 手上げや同意をしない方向への有意な効果が見られた。次に「障害者手帳」は  $\text{Exp}(\beta) = 1.688$  ( $p < .01$ ) となっており, 手上げや同意をする方向へ, 「三歳未満の子持ち」は  $\text{Exp}(\beta) = .450$  ( $p < .01$ ) となっており, 手上げや同意をしない方向への有意な効果が見られた。「元気」対「障害・不自由あり」因子は  $\text{Exp}(\beta) = .778$  ( $p < .05$ ) となっており, 手上げや同意をしない方向への有意な効果が見られた。最後に「民生委員信頼」因子について,  $\text{Exp}(\beta) = 1.507$  ( $p < .01$ ) となっており, 手上げや同意をする方向への有意な効果が見られた。

### 3-3. 考察

上記のロジスティック回帰分析の結果から, 以下のことが考えられる。まずはワークショップと先行研究で得られた7つの変数のうち, 有意な結果であった「元気」対「障害・不自由あり」と「民生委員信頼」について述べる。ワークショップおよび先行研究では, 12の仮説要因が得られたが, 因子分析と信頼性分析により最終的に7つに集約された。この7つのうち, 有意な結果が示されていたのは, 前述のとおり「元気」対「障害・不自由あり」と「民生委員信頼」の2つであった。まず「元気」対「障害・不自由あり」についてであるが, 手上げや同意をしない方向への有意な効果が見られたことは, 先行研究からも言えることであるが合理的な結果である。自身のことをまだまだ元気で, 助けられるよりむしろ助ける側だと思っている人が, 自身から援助を求めるとは考えにくい。次に「民生委員信頼」についてである。オッズ比を見ると, 有意であった変数のうち, 「障害者手帳」の次にオッズ比が高くなっている。つまり本研究で使用した変数の中で, 2番目に影響が大きいということが示されているのである。さらにこの「民生委員信頼」は, 有意であった結果のうち唯一外部からの介入が可能な変数である。「民生委員信頼」以外の変数は, 対象者の属性や家族環境となっており, 変えようとしても容易に変えられるものではない。実際に地域で個人情報提供に同意する人を増やそうとするのであれば, この「民生委員信頼」は効果も高く有用なポイントであると言える。

次に属性変数についてみていく。「新興住宅地ダミー」について手上げや同意をしない方向への有意な効果が見られたのは, 住民同士の関わり合いが根底にあると考えられる。前述の「民生委員信頼」ともつながるが, 近隣の人々のことを良く知らない場合,

自身の個人情報を開示して援助を求めるといことは考えにくい。お互いをよく知り合っているほうが、いざというときに助けを求めやすい。「新興住宅地」は名前のとおり新しく建設された住宅地域であり、住民も新しく外部から移り住んできた人が多い。自ら手上げや同意をするには、難しい社会的背景があると言える。「頼りになる人・同居」が手上げや同意をしない方向へ影響することは、納得できる結果である。頼りになる人がもっとも身近な場所、同じ屋根の下で暮らしているのであれば、わざわざ外部に援助を求める必要はないからである。「障害者手帳」が手上げや同意をする方向への有意な効果を示しているのは、合理的に考えて、また先行研究の個人の問題の深刻さ、症状（Rockwood & Braothwait 1994）および事前の援助体験の有無（高木・妹尾 2006）によっても説明できる。障害者手帳を所持しているということは、自身の身体の問題点が客観的に評価されている状態であり、自分自身で認識しているということである。さらにその問題点に対して、すでに何らかの援助を日々受けている可能性が高い。その場合、援助を求めるために自ら手上げや同意を行うことは、至極全うな行為である。最後に「三歳未満の子持ち」についてである。三歳未満の子どもがいるのであれば、援助を求める必要があるように思われるが、結果は逆になっている。その理由として考えられるのが、この質問紙調査への回答者が三歳未満の子どもの親や家族であるということである。三歳未満の未就学児の場合、常に大人と一緒に行動していると考えられる。つまり子どもには援助が必要かもしれないが、援助する大人が必ずそばにいるのである。そのため、手上げや同意をしない方向への効果を有していると考えられる。

### 3-4. 今後の課題

今後の課題として、実際に個人情報提供への同意や手あげを促すために、どのような対策が考えられるか検討する必要がある。民生委員の役割の重要性は示唆されたが、具体的な方法の提言には至っていない。前述の通り、同意方式による個人情報収集や、その後の個別避難支援計画策定など、精華町の民生委員は行政とともに災害時要援護者支援のために精力的に活動している。今まで以上に民生委員の活動を周知し、より当事者である災害時要援護者と信頼関係を築いていくには、民生委員個人個人の努力だけでなく、それ以外からのアプローチも必要ではないかと考える。

精華町では福祉課と共に、災害時要援護者対策の中心で活動を行っていたのは民生委員であったが、他の外部機関との連携はどうなのであろうか。例えば京都市では、『京都市域における見守り活動促進事業実施要綱』により、災害時要援護者の情報を地域包括支援センターや社会福祉協議会、地域の民生委員の間で共有し、同意を得られれば学区単位の自治連合会とも共有することで、平常時の見守り活動をより充実させることを促している。対象者との信頼関係で考えるならば、民生委員は確かに地域に非常に近

く寄り添っている存在ではあるが、障害者の場合は普段からより相談し頼っているのは障害者地域支援センターであるという場合も考えられる。個人情報取り扱いにおける責任による負担を考えれば、すでに法的な問題に発展した場合の保障システムを有している社会福祉協議会は、有力なパートナーになりうると考えられる。多様な組織と連携し情報の収集と共有にあたることは、より手厚い支援を行えることにつながるが、同時に個人情報の漏えいが起こる可能性を高めることにもなる。行政は各自治体の条例や要綱をうまく用いて、バランスをとりつつ災害時要援護者対策を進めていくことが求められている。

### 謝辞

本研究を行うにあたり、精華町福祉課の岩井秀樹様にはお時間を割いてヒアリング調査に協力頂きましたこと、深くお礼を申し上げます。また、質問紙調査のご協力くださった福祉課の方々にも、深くお礼を申し上げます。本研究は、文部科学省科学研究費基盤研究（A）「福祉防災学の構築」（研究代表者：立木茂雄 同志社大学）の下に行われました。

### 参考文献

- Fisher, Jeffrey. D., Nadler, Arie., & Whitcher-Alagha, Sheryle., 1982, "Recipient reaction to aid." *Psychological Bulletin*, 91 : 27-54.
- Good, Glenn. E, Dell, Don. M., & Mintz, Laurie. B., 1989, "Male role and gender role conflict : Relations to help seeking in men," *Journal of Counseling Psychology*, 36 : 295-300.
- Halgin, Richard. P., Weaver, Dana. D., Edell, William. S., & Spencer, Peter. G., 1987, "Revelation of depression and help-seeking history to attitudes toward seeking professional psychological help." *Journal of Counseling Psychology*, 34 : 117-185.
- 星旦二, 市子太郎, 高橋俊彦, 栗盛須賀子, 長谷川卓志, 竹宮健司, 秋山哲男, 中村一樹 : 2007 「都市住宅高齢者における災害時避難可能性の実態とスクリーニング関連要因」『地域安全学会論文集』9, 245-251.
- 本荘雄一・立木茂雄 : 2012 「大規模広域災害時における自治体間協力に関する考察－東日本大震災時における神戸市職員派遣の事例から」『地域安全学会論文集』, 18, pp.411-419.
- Loevinger, J., 1957. Objective tests as instruments of psychological theory. *Psychological Reports (Monograph supplement 9)*, 3, 635-694.
- 内閣府災害時要援護者の避難対策に関する検討会 : 「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」, 内閣府防災情報のページ, 2006. (2012年1月24日取得 [http://www.bousai.go.jp/hinan\\_kentou/060328/inanguide.pdf](http://www.bousai.go.jp/hinan_kentou/060328/inanguide.pdf)).
- 水野治久・石隈利紀 : 1999 「被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向」『教育心理研究』120-129.
- Nunnally J. C., 1978. *Psychometric Theory*, 2nd ed. New York : McGraw-Hill.
- Rickwood, Debra. J., & Braithwaite, Victoria. A., 1994, "Social psychological factors affecting help seeking for emotional problems." Rickwood, Debra. J., & Braithwaite, Victoria. A., 1994, "Social psychological factors affecting help seeking for emotional problems." *Social Science & Medicine*, 39 : 563-572., 39 : 563-572.
- 精華町 : 2007 『精華町災害時要配慮者登録制度実施要綱』 [http://reiki.town.seika.kyoto.jp/reiki\\_honbun/k123RG00000752.html](http://reiki.town.seika.kyoto.jp/reiki_honbun/k123RG00000752.html).
- 精華町 : 2004 『精華町個人情報保護条例施行規則』 [http://reiki.town.seika.kyoto.jp/reiki\\_honbun/k123RG00000666.html](http://reiki.town.seika.kyoto.jp/reiki_honbun/k123RG00000666.html)
- 妹尾香織・高木修 : 2011 「援助・被援助行動の好循環を規定する要因——援助成果志向性が果たす機能の



- 検討」関西大学『社会学部紀要』, 42(2).
- 消防庁：「災害時要援護者の避難支援対策の調査結果」：1-6, 2011, (2012年1月24日取得 [http://www.fdma.go.jp/neuter/topics/houdou/h24/2407/240703\\_1houdou/01\\_houdoushiryou.pdf](http://www.fdma.go.jp/neuter/topics/houdou/h24/2407/240703_1houdou/01_houdoushiryou.pdf)).
- 高木修・妹尾香織：2006「援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性——行動経験が援助者及び被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究」関西大学『社会学部紀要』38(1), 25-38.
- Tatsuki, S, 2012, "Old Age, Disability, and the Tohoku-Oki Earthquake" *Earthquake Spectra*, 29, 403-432
- Tatsuki, S, 2012, "Challenges in Counter-disaster Measures for People with Functional Needs in Times of Disaster Following the Great East Japan Earthquake." *International Journal of Japanese Sociology*, 21, 12-20.
- 立木茂雄：「高齢者、障害者と東日本大震災：災害時要援護者の実体と課題」, 『消防科学と情報』, 7-15, 2013.
- 脇本竜太郎：2008「自尊心の高低と不安定性が被援助志向性・援助要請に及ぼす影響」*The Japanese Journal of Experimental Social Psychology*, 47(2), 160-168.
- 山崎栄一・立木茂雄・林春男・田村圭子・原田賢治：2006「災害時要援護者の避難支援に関する政策法務のあり方について」『地域安全学会論文集』8, 323-332.
- ：2007「災害時要援護者の避難支援－個人情報のより実践的な収集・共有を目指して」『地域安全学会論文集』9, 157-166.
- 山崎栄一・林春男・立木茂雄・田村圭子：2011「災害時要援護者の個人情報をめぐる政策法務－新たな整理・分析枠組みの構築と違法リスクの抽出－」『地域安全学会論文集』15, 313-322.
- 全国社会福祉協議会：2009『平成25年度【社会福祉協議会用】社協の保険の手引き ふれあいサロン・社協行事傷害保障』 <http://www.fukushihoken.co.jp/pamphlet/shakyou.pdf>.

Factors Predict the Agreement or Disagreement of  
Personal Information Provision in Times of Disaster :  
Through Questionnaire and Workshop at Seika town in Kyoto

Anna Matsukawa and Shigeo Tatsuki

---

This paper reveal what prescribes the agreement or disagreement to provide personal information at the time of disaster. In results, the reliance for community welfare commissioners is a very important factor to encourage the agreement to provide personal information. For that, conducted workshop to welfare commissioner and questionnaire research to people with special needs in times of disaster (PSND). From experience of the Great East Japan Earthquake, it has become clear there are still many subjects about evacuation support for In order to cope with this subject, it is necessary to encourage the agreement to provide personal information. In results, the confidence for community welfare commissioners would encourage the agreement to provide personal information.

**Key words** : Great East Japan Earthquake, People with special needs in times of disaster, Personal information provision, Agreement or disagreement